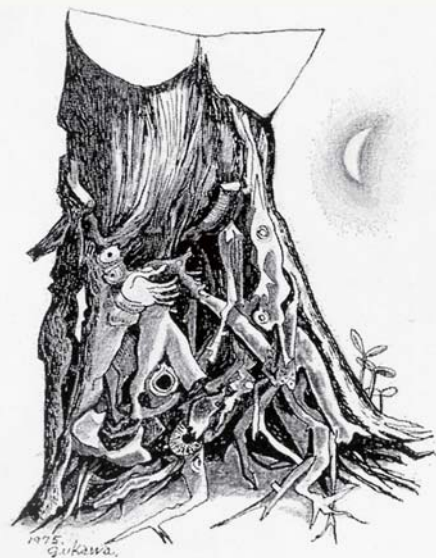


30周年記念展を迎えて

岩 船 修 三



カット〈組織〉鶴川五郎

全道美術協会が誕生したのは敗戦のまっただ中で、すべての日本人が疲労困憊に陥った混乱と不安の時期であった。

美術界も例外ではなく公募展や個展も開催が不可能な虚脱状態の時代である。

絵具もキャンパスも入手困難で、手に入った色も筆に色が染る悪質のものであった。

このような混沌たる終戦の1カ月後の9月に北海道新聞社の事業部長の武藤氏と関口氏からこの機会に北海道に強力な美術団体を造って見たいのだが僕に動いてくれないかという連絡があった。戦争中には道関係の作家が多勢疎開していたので、よい機会であると僕は考えて承諾した。

道新がなぜに僕個人に直接話を持ちかけてきたかを、この際個人的なことになるが全道展の創立にも関連があるので当時の僕の立場を書いて見たいと思う。

僕は第2次大戦の勃発をパリで知り、フランスの中を逃げ回っていた。アメリカ経由で帰国したのは14年の冬で、16年には日本が宣戦したので僕は大きな戦争を二度体験することになる。18年には遂に召集令状が来て旭川師団に入隊した。幸いにも陸軍省からの指令で師団の報道部に移ることになった。僕はこの喧嘩には負けられぬと思った。それは欧米の生活を見ているので日本の生活が、いかにも低く、負けたならもっとみじめな姿となると考えたからである。画家としての僕の立場で報道の役職を有効に利用することを考えた。

芸術家は芸術の途で協力することが、銃を持って人を殺したり、穴掘りをするよりもよいことと思ひ、当時の報道部の上官で軍人には稀な芸術に理解ある中瀬少佐の協力を得て、全道に、美術、文学、音楽、演劇の部門で陸軍報道奉公隊を結成することができた。

美術部門の隊長には旭川の高橋北修、札幌は能勢真美、小樽は国松登、釧路は佐々木栄松、函館は田辺三重松の諸氏で、能勢氏と佐々木氏を除いて他の人は全道展の創立に参加した人である。奉公隊の結成によって陸軍省から画材の配給を受けることができ戦争画を描きながらも自由な作品も描くことが可能であったと思う。配給は主として高橋氏が上京して受けていた。

このような僕の立場が戦後において各地に疎開していた作家との連絡が便利であったために依頼してきたのだと思う。

当時は食糧も交通も困難で汽車の乗り降りも窓からで小便も線路上でやる始末で、腰弁のにぎり飯をつくるのに苦労したものである。旅も10月下旬であったので雪の中を歩き回るのが苦労したものである。各地区での会合も終り11月には最終的な集まりを道新の後援により札幌での集会を開催することができた。

その席上で満場一致の下に創立を決定し、命名は繁野三郎氏の提案の全道美術協会に決まった。

創立会員は故居串、池谷、一木、故伊藤、岩船、故上野山、小川、小川原、故菊地(精)、故木田、国松、斉藤(広)高橋、田中、故田辺、西村、橋本、松島、三雲、故山内、故川上の21人でその内8人の会員が今は故人になってしまった。名付親の繁野氏と能勢氏の不参加は、全道展に参加しなかった作家からの道展復起の意向があり、再興せねばならなかったので退会したのである。

当時の創立会員の年令は今でこそ白髪の人が多くなってきているが、40才代の会員が8人位で後は30代という若者であった。

第1回の公募展は21年6月に札幌の三越で開催され、久しぶりの本格的公募展で大変に盛んな展覧会であった。

作品は現在のような大作はなく、出品者は50号以下の作品が多く。会員でも大作は少なかったことから見て戦時中の芸術界の衰退と画材の不足のひどさが伺われ今の全道展を考えると感慨無量である。

第2回展からは札幌●今井本店に会場を移し現在まで30年の永い間お世話になることになったが、その間には審査場や会場のことで宣伝部の人とお互に馴れないために口論したこともあり大変にご厄介をかけたものである。

一つの事を創りあげて、それを永く継続していくことは大変な努力を要するものである。全道展も永い間高水準を保ってよくぞ成長したものである。そしてようやく30歳の働き盛りの年令となったのである。僕は全道展の成長の原因は現在に至るまでに一人のボスの存在もなく、各作家の傾向も多角で中央展の異なる会の会員で、具象、抽象の一方に偏することなく良いものは採るという自由な審査にあるのだと思う。

そのために審査間には口論も相当に苛烈となるが、それが全道展の水準を高める結果となっているのである。

審査は毎年厳選となっているが、これは会員会友が頑張っていることと会場の狭さからもきているが、寛選によって起る質の低下を恐れるからで、たしかに入選者を増すことで入場者が多くなり経済的には豊かになるが、それよりも高水準の作品を保つための方に意義があるとし、今後とも厳選主義で行こうということになったのである。出品者はこの厳選を通して入選するのであるから大いに誇りをもってよいだろう。

今回30周年記念展を迎え、会員、会友が良い作品を発表することによって全道展の益々魅力ある会として、40年、50年と成長して行くことであろう。今後共北海道の芸術界の発展に貢献することを誓うものである。